

令和元年 6月 朝会

みなさん おはようございます。

1年生は遠足、2年生はキャンプ、3年生は修学旅行と、1学期の大きな校外行事が無事終了しました。

各学年とも行事に向けてしっかりと準備を行い、見事成功へとつなげていました。一人ひとりが、行事の目標を達成されたかどうかをぜひ振り返ってみてください。

1年生の遠足を終えての作文では、「この遠足から、私が学んだのは友達と協力する大切さだ。当たり前のように聞こえるが、あらためて協力することの大切さに気づくことができた。これから、運動会や文化発表会など、様々な行事がある。そんなとき、仲間と協力し、温かい言葉をかけたいと思った。」と書いてありました。

ぜひ、2学期以降の行事につなげてほしいと思います。

まずは、今週はじまる期末テストに向けてしっかりと授業を受け、準備を進めてください。学校全体で、落ち着いて学習に取り組む雰囲気をつくっていきましょう。

さて、6月は雨の多い季節です。
残念ながら、2年生のキャンプも、1日目は雨模様でした。

今日は、「梅雨」について話したいと思います。

梅雨は、春から夏に移り変わるときに前線が、日本付近に停滞して起こる季節現象です。梅雨という言葉ですが、梅雨入り・梅雨明けなど「ツユ」と読む場合と、梅雨前線など「バイウ」と読む場合があります。

梅雨の語源には、色々な説があります。その一つ「梅雨(バイウ)」は中国で生まれた言葉で、長江(揚子江)流域で梅の実が熟する頃

に降る雨ということから名づけられました。

ちょうど今、つきみ野中学校の梅の実も熟して下に落ちているところですよ。

また、黴（カビ）が生えやすい時期の雨だからという意味で「黴雨（バイウ）」と呼んでいたものが、カビでは語感がよくないので、同じ読みで季節に合った「梅」の字を使い「梅雨（バイウ）」になったという説もあります。

では、日本に「梅雨（バイウ）」という言葉が伝わったのはいつごろかと言うと、時代は、平安時代までさかのぼります。この時代の詩歌集〔藤原公任（ふじわらのきんとう）撰「和漢朗詠集」（わかんろうえいしゅう）〕に「梅雨」（バイウ）という言葉を読んだ詩の一節があり、すでに平安時代には、日本に伝わっていたようです。

しかし、この時代は、梅雨のことを（さみだれ、さつきあめ）と呼ぶことが主流でした。「さ」とは5月のこと、「みだれ」は「水垂れる」の意味です。「5月に梅雨」「時期が少し早いのでは？」と思われたかもしれません。ここで言う5月は、旧暦の5月を表していて、現行歴の6月にあたります。同じような言葉の例を見ると「五月晴れ（さつきばれ）」は、本来は梅雨の晴れ間を伝えた言葉であったり、「五月闇（さつきやみ）」は、梅雨空の暗さを表す言葉であったりします。

その後、日本では「梅雨」の読み方が（バイウ）から（ツユ）に代わって行きました。でも、いつごろからとうとう？江戸時代の「日本歳時記」の中に、「これを梅雨（ツユ）となづく」という記述があります。記述から、江戸時代あたりには、（バイウ）を（ツユ）と読んでいたようです。

「梅雨（ツユ）」の言葉の由来には、様々な説がありますが、やはり、この季節の自然や植物に関連した説が多いようです。

植物にとって大切な雨をもたらす梅雨ですが、時には大雨による災害へとつながってしまう場合があります。最新の気象情報に注意をしつつ、これから梅雨明けまでの季節は、雨と上手につきあっていきたいですね。

以上で終わります。